

弁証法的実践感性批判

河 村 盛 一*

A Critique of Dialectical Practical Sensibility Moriichi KAWAMURA

(1973年9月29日受理)

まえがき

本稿では、マルクスが唯物史観の前提として設定した、彼の人間観を、主として彼が唯物史観といわれるものを「定式化」(“formuliert”)した「経済学批判」以前の、いわば「前期的」諸著作を資料として論考した。そして論述にあたっては、私なりに理解したマルクスの人間観を、一人称のかたちで書いた個所もある。唯物史観と人間とは、どのようにかかわり合っているのか、また人間の愛や情熱との関係についても私見をのべるつもりである。

1. 実存としての人間

すべての研究の出発点であり、たえず回帰すべき根本事実は、生きて生活している人間(複数)の実在である。マルクスは、これを「生きている人間諸個人の 現実存在」(die Existenz lebendiger menschlicher Individuen.)と書いている¹⁾。なお、“Existenz”は、本稿では実存と訳した。彼は人間実存のための基本前提として、つぎの「三つの契機」(drei “Momente”)をあげる²⁾。

第一契機

「人間は『歴史を作りうるために』、生きなければならない。生きるためには、まず何よりも先に、食べること、飲むこと、住むこと、着ること、その他のことをしなければならぬ³⁾。」人間は生きるためには、これらの欲求を、まず満足させねばならないのである。

“[die Menschen imstande sein müssen zu leben um “Geschichte machen” zu können. Zum Leben aber gehört vor Allem Essen und Trinken, Wohnung, Kleidung und noch einiges Andere.]

「だから、あらゆる歴史把握において、先ず第一にやるべきことは、この根本事実が有つ意味を周到に観察し、その重さの程度と範囲とを、つぶさに考察して、それに正しい権利を認めることである⁴⁾。」

「Das Erste also bei aller geschichtlichen Auffassung ist, dass man diese Grundtatsache in ihrer ganzen Bedeutung und ihrer ganzen Ausdehnung betrachtet und zu ihrem Rechte kommen lässt.」

現在までの歴史研究において、食・衣・住に関する、生活史・風俗史といったものが、はたして周到に考察され、それについて、正しい権利が認められてきたであろうか?

第二契機

*人文科学および史学研究室

実存としての人間は、実に多種多様な欲求（飢えをもふくめて）をもっている。はじめの欲求が充たされると、「充たされた欲求そのもの・欲求を充たした行為 および欲求を充たすために、すでに獲得された手段とが、新しい諸欲求へ導く。そして、この新欲求の産出が最初の歴史行為である⁵⁾。」

「das befriedigte erste Bedürfnis selbst, die Aktion der Befriedigung und das schon erworbene Instrument der Befriedigung zu neuen Bedürfnisse führt und diese Erzeugung neuer Bedürfnisse ist die erste geschichtliche Tat.」

せめて、おカユを腹いっぱい食べたいと願っていた者が、おカユに飽きると、やがて麦めしが食べたくなる。麦めしに飽きると米のめしがほしくなって、米を作りはじめる。実存としての人間の欲求は直接否定されてはならない。欲求にたいしては正しい権利を認めて、まず肯定する。肯定して満足させることによって、最初の欲求は否定される。肯定的否定である。このようにして、肯定的に否定された欲求 と 欲求充塞手段とは、新らたな欲求を産むのである。これが実存人間の第二契機である。

第三契機

第三の契機は、「自分の生命を日々に新らたにしている人間は、別の人間を作りはじめ、生殖しはじめる。すなわち、男 と 女の関係、親 と 子の関係、家族がそれである⁶⁾。」

「die Menschen, die ihr eignes Leben täglich neu machen, anfangen, andre Menschen zu machen, sich fortzupflanzen-das Verhältnis zwischen Man und Weib, Eltern und Kindern, die Familie.」

こうして、労働による自分自身の生命の再生産および生殖による、別の生命の生産は、同時に二重の関係、つまり一方では自然関係として、他方では社会関係として現われる。

以上の三契機をもつ実存としての人間は、単なる仮説でもなければ、論理の虚構でもないことは、説明を要しない事実である。「文明」諸国のすべての人間も、アフリカのピグミーも例外なく、毎日実行している根本事実である。唯物史観は、まずはじめに、このような人間の実存を確認し、この「現世的基盤」(「eine irdische Basis」)から出発する⁷⁾。だから、ここで前提されている実存としての人間は、人間が歴史を作る基本条件としての、生物学的・自然人である。

2. 人間の身体構造 と 身体運動

つぎに、実存としての人間の特異な身体構造 と その運動に注目しよう。なぜなら人間の身体構造は、人間の実存の仕方を決定的に条件づけているからである。人間を考えたとき、頭（精神）と胴体（物質）を切りはなしたりすることなく、常に全体としての人間の身体構造 と その運動を考察しなければならない。手に道具を持って、立って歩るき、働いている人間、これこそが実存としての人間の在り方の積極的条件である。

「ひとは、人間を意識によって、宗教によって、その他好きなものによって、動物から人間を区別することができる。人間自身は、彼らの生活手段を生産しはじめるやいなや動物と区別される。そして、この生活手段の生産は、人間の身体組織によって、条件づけられた、ひとつの必要な処置なのである⁸⁾。」

「Man kann die Menschen durch das Bewusstsein, durch die Religion, durch was man sonst will, von den Tieren zu unterscheiden. Sie selbst fangen an, sich von den Tieren zu unterscheiden, sobald sie anfangen, ihre Lebensmittel zu pro-

duzieren, ein Schritt, der durch ihre körperliche Organisation bedingt ist.]

多様な欲求をもつ人間の身体構造 と その運動とを積極的に肯定するところから出発する、この立場と対照的な態度をとっているのは、カントである。カントは、身体は純粋な精神生活に障害を与えるものとして、否定的立場をとる。

「身体は思惟の原因ではなくて、思惟を制限する条件にすぎない。従って身体は感性的、動物的生活を促進するものであるが、それだけにまた純粋な精神的な生活に障害を与えるものと見なされるのである⁹⁾。」

「Der Körper wäre also nicht Ursache des Denkens, sondern eine bloss restringierende Bedingung desselben, mithin zwar als Beförderug des sinnlichen und animalischen, aber desto mehr auch als Hindernis des reinen und spirituellen Lebens anzusehen,..」

身体の否定的罪悪観が、肉食を絶ち、女性をおとしめ、性行為を不浄視する禁欲の思想につながる。身体的感性的なものこそが、人間の身体運動を媒体として、弁証法的に理性的なものに転化する。身体的感性的なもの直接否定は、何物をも産出せず、所詮は空しい不毛に終り、全命は枯れる。

感性 と 理性は、たがいに止揚し合いながら運動しつづけていく。フランス語のサンス (sense) には、感性、理性の一見、対極的な意味がある。生 (なま) 身の身体と、その身体のすべての欲求を、人間の生活、食・衣・住を、そのまま、すなおに肯定し、これらの諸欲求を満足させるために生活している人間を、全体として受け入れ、正しく評価し、位置づけなければならない。こうした実存としての人間、生活している人間が、人間がつねに回帰すべき根源的人間である。「人間自からが、社会的人間に、すなわち人間らしい人間に回帰」することである¹⁰⁾。

「Rückkehr des Menschen für sich als eines gesellschaftlichen, d. h. menschlichen Menschen.」

「事物は根源において把えるときラディカルとなる。人間にとっての根源は、しかし、人間それ自体である。」「人間は人間にとって、最高の存在である¹¹⁾。」

「Radikal sein ist die Sache an der Wurzel fassen. Die Wurzel für den Menschen ist aber der Mensch selbst. ... der Mensch das höchste Wesen für den Menschen sei.」

人間は生きつづけるために産み、産むために生きている。そして生きるために労働し、歴史を作る。これが全部であり、人間の真実である。真実なものは、具体的であり、単純であり、美しい。それが、抽象化され、複雑となり、楽しくもなく、美しくなくなるとき、そのときは、人間が真実なものを失ったときである。食うことは、本来、楽しく美しい、産むこと (恋愛 と 家庭をふくめて) も、働くことも、同じように、よろこびであり、美しいものである。人間である、とか、人間らしいというのは、この事実を指している。古人もいっているように、楽しむ境地が人間の最高の姿である¹²⁾。しかし、楽しむよりも遊ぶ境地が人間の真の姿ではあるまいか。遊食・遊産・遊働が、最も望ましい姿であると思う。J・ホイジンガは、人間は本来ホモ・ルーデンス (「Homo ludens」) である。人間の遊びの行為から文化が発展する、と説いている¹³⁾。また、すでにF・V・シラーも「彼 (人間) は唯だ彼が遊戯するところに於てのみ、全然に人間である。」という¹⁴⁾。

高橋誠一郎氏は、福沢諭吉も、人生は戯れと認めていたと書いている。同氏が福沢からもらった「半切に記された語」、「戯去戯来自有真」(戯れ去り戯れ来り、おのずから真あ

り)について、「先生は人生を戯れと認めながら、その戯れを木気に勤め」られた、と回想してられる¹⁵⁾。これはマルクスが究局(実は、そんなものはないのであるが)において予図する人間社会と人間の真姿に似通ようものがある。すこし長文ではあるが、実存としての人間の真姿をえがいた、と思われる個所の訳文と原文を併記しよう。

「私的所有を積極的に止揚する、ということは、人間の存在とその生活、対象行動を行なう人間および人間のために、人間による人間の行動を感性的に自分のものとする、ということである。このことは、たんに直接の、一面的な享楽をつかむとか、占有することか、所持することかという意味だけではない。人間は全面的な方法で、人間の全面的な存在を、したがって、全体的人間を自分のものにするのである。世界にたいする人間のすべての関係、見ること、聞くこと、嗅ぐこと、味わうこと、さわること、考えること、直観すること、感ずること、意欲すること、活動すること、愛すること、つまり人間の個性のすべての器官は、人間の対象行動において…あるいは人間の対象への行動において、対象を自分のものとするのである¹⁶⁾。」

「die positive Aufhebung des Privateigentums, d. h. die sinnliche Aneignung des menschlichen Wesens und Lebens, des gegenständlichen Menschen, der menschlichen Werke für und durch den Menschen, nicht nur im Sinne des unmittelbaren, einseitigen Genusses zu fassen, nicht nur im Sinne des Besitzens, im Sinne des Habens. Der Mensch eignet sich sein allseitiges Wesen auf eine allseitige Art an, also als ein totaler Mensch. Jedes seiner menschlichen Verhältnisse zur Welt, Sehn, Hören, Riechen, Schmecken, Fühlen, Denken, Anschauen, Empfinden, Wollen, Tätigsein, Lieben, kurz, alle Organe seiner Individualität, ... sind in ihrem gegenständlichen Verhalten oder in ihrem Verhalten zum Gegenstand die Aneignung desselben.」

「私的所有は、われわれを非常に暗愚にし、一面的にしてしまったので、われわれが対象を所有するとき、はじめて対象がわれわれのものとなる。…それゆえ、私的所有の止揚は、人間のすべての感性と特性とを完全に解放する。しかし、この止揚は、これらの感性と特性とが、まさしく人間的に、すなわち主体的かつ客体的となることによって完全な解放となるのである。眼の対象が、社会的、人間的な、そして人間から発源する、人間のための対象となると、眼は人間の眼となる¹⁷⁾。」

3. 実践感性の対象変化運動

受容的感性

カントを読むと、じっとしてまわりを觀たり考えたくなる。マルクスを読んでいると、外へ飛び出したくなる。カントにとっては、感性は時間・空間の形式のもとで直観し觀照する。このばあい感性は対象から触発されて(affiziert werden)表象をうける。彼は、これを感性の受容性(Rezeptivität)とよび感性的直観と名づけている¹⁸⁾。

「Die Fähigkeit, (Rezeptivität) Vorstellungen durch die Art, wie wir von Gegenständen affiziert werden, zu bekommen, heisst Sinnlichkeit. Vermittelt der Sinnlichkeit also werden uns Gegenständen gegeben, und sie allein liefert uns Anschauungen;」

カントにあっては、感性は、このように外からの対象に触発されて、はじめて対象を受容し、それを直観し觀照するところの、受動的な能力でしかない。これは觀る立場である。

万葉人は、もっぱら、こうした受容的感性の態度で生活し歌ったと思われる。

こぞ見てし 秋の月夜は 照らせども

あい見し妹は いやとしさかる¹⁹⁾

この歌の、「照らせども」のかわりに、「かわらねど」と書きかえてみると、どうなるであろうか。照らす、という受容的感性表現が、かわらぬ、という概念表現に移行する。これは万葉人の心からほど遠いものとなる。しかし人間の感性は、観照し、直観する作用しかないのだろうか。外からの触発を、じっと待っているだけのものであるのか。

実践感性活動

人間の感性には、もう一つの面がある。それは人間感性の活動的な面(die tätige Seite)である。感性は本来**主體的に**(subjektiv)対象に対して発動する能力をもつ。これが**実践感性活動**(die Praktische sinnliche Tätigkeit)なのである²⁰⁾。

「Der Hauptmangel alles bisherigen Materialismus (den Feuerbachschen mit eingerechnet) ist, dass der Gegenstand, die Wirklichkeit, Sinnlichkeit nur unter der Form des Objekts oder der Anschauung gefasst wird; nicht aber als Sinnlich menschliche Tätigkeit, Praxis; nicht subjektiv. Daher die tätige Seite abstrakt ... aber er fasst die menschliche Tätigkeit selbst nicht als gegenständliche Tätigkeit.」

もし幼児が、同じ場所に固定されたまま、ただ、まわりを見まわすだけであれば、外界はすべて、いちような平面に見える。だから月をとろうとして手を指しのべる。幼児が自他を意識して、三次元の世界を認知するためには、受容的感性の世界から一步ふみ出し、身体を動かして、はいまわり、歩いてみなければならぬ。ルソーは幼児が、このような身体「運動によってのみ」(「only by movement」)「空間の観念」(「the idea of space」)と自他の相違を学びとることを、のべている²¹⁾。これは、実践感性運動 と 知ることとの関係を確認する適例である。

実践感性の対象活動

人間の感性は、単に活動するばかりでなく、対象に対して働きかける。このような運動を**実践感性の「対象活動」**(「gegenständliche Tätigkeit」)という。

ひとつの例をあげよう。

『二つの『春』をめぐって 藤本幸男

まず『春』の詩二題を見ていただきたい。

(1) 春がきたから

『だいこんの、はながさいている。』

と、いった。

うちの、さかえが、

だいこんの花とって、

『これが春か』

と、いった。

ぼくは『春じゃ』

と、いった。

(2) 春は、いいな、

だって花も草木も、めをだして、

たのしいんだ。

ひばりもピイチクないている。

わたしは、とっても春がすき²²⁾。」

この二つの詩を評価して、藤木さんが、つぎのように書いている。

「圧倒的に後者を選ぶものが多く、その理由に『さわやかな感じだ』『楽しそうだ』『気持ちがよく出ている』といい、すべて優等生の発言であった。

学習に遅れた子2人が『春を発見した』と前者に感動していた。頭の中だけの、かっこいい子ども、そして山や畑の自然に感動しない曇った日。“現代”は子どもの感覚まで、まひさせてしまったのか。しかし『春を発見した』という子どもの、澄みきった目、たくましい創造力に、今日の教育の光明を見出すことができる。

自然の中で、からだを動かし、仕事をする子ども、自分の生活をつくりだす子どもこそ、たしかに実感をこめて詩をつくり、人間がつくられるのだ、ということを感じるのである²³⁾。」

この二つの詩を読みくらべて感ずることは、(2)は春を受容的・感性的に観想し、概念の世界で扱えたものであり、(1)は、さきにも述べた実践感性の対象活動によって春を扱えたものである。

4. 実践感性の対象変化運動 と 人間の自己変革

組織よりも人間の心であるとか、何をするにしても、先づ人間の自己変革からはじめねばならないといわれる。そこで教育だ、宗教だ、道徳だ、といろいろな説が出される。哲学の本を読む。座禅をはじめ。果たして、それによって人間が革新できるのであろうか。人間は、実践感性の対象変化運動によって環境(人間・社会・自然)に働きかけ、これを変えらるることによってのみ、自己を変革してきたことを、人間の歴史が教えている。

「環境の変化と 人間の活動または自己変革との一致は、革命的実践としてのみ扱えられうるし、また合理的に理解されうる²⁴⁾。」

「Das Zusammenfallen des Änderns der Umstände und der menschlichen Tätigkeit oder Selbstveränderung kann nur als revolutionäre Praxis gefasst und rationell verstanden werden.」

つぎの一節は、実践感性の対象変化運動 と 人間の自己変革との関係を、最も簡明に現わした重要な文である。

「Indem er (der Mensch) durch diese Bewegung (Körperbewegung) auf die Natur ausser ihm wirkt und sie verändert, verändert zugleich seine eigne Natur.」

「人間は、この運動(身体運動)によって人間の外にある自然に働きかけ、これを変えらると同時に、それによって人間固有の本性を変えらる²⁵⁾。」

人間の、このような実践感性の対象変化運動によって、人間は絶えず化成していく。だから不変の人間の本性とか本質とかいうものは何もない。あるのは実存としての人間の主体的な、この運動である。この身体運動によって、人間 と 自然とは、たがいに止揚し合いつつ歴史が作られていく。これを「人間 と 自然の同一」というのである²⁶⁾。

「Hier wie überall tritt die Identität von Natur und Mensch auch so hervor, dass das bornierte Verhalten der Menschen zur Natur ihr borniertes Verhalten zueinander, und ihr borniertes Verhalten zueinander ihr borniertes Verhältnis zur Natur bedingt...」

一例をあげよう。私は一人の野生インディアン(その名はイシ)の写真を見ながら、人間の実践感性の対象変化運動を書いている。イシは、がっしりした裸体に自分で作った鹿

の皮のフンドシを締め、これも自作の弓と矢をたずさえて、密林に分け入り、いくぶん前かがみに、ひざを曲げ、弓を引きしぼって、獲物の鹿を狙っているところである²⁷⁾。

5. 実践感性の対象運動 と 歴史

人間の実存が実践感性の対象変化運動であり、それによって人間の歴史が作られるのであるから、人間の歴史は同時に自然の歴史となる。

「われわれは唯一の科学を知っているのみである。それは歴史の科学である。歴史は二つの方面から考察される。すなわち歴史は自然の歴史と人間の歴史に分けられる。だが、この両者は分離されえない。人間が活着しているかぎり、自然の歴史と人間の歴史は、たがいに条件づけ合う²⁸⁾。」

「Wir Kennen nur eine einzige Wissenschaft, die Wissenschaft der Geschichte. Die Geschichte kann von zwei Seiten aus betrachtet in die Geschichte der Natur und die Geschichte der Menschen abteilt werden. Beide Seiten sind indes nicht zu trennen; solange Menschen existieren, bedingen sich Geschichte der Natur und Geschichte der Menschen gegenseitig.」

この一節は、はじめドイツ・イデオロギーの原文に記され、後に抹消されたのであるが、「人間と自然の同一」性を歴史学の見地から論じたものとして、きわめて興味深いものである。

人間の主体性を幅調するH・マルクーゼ、G・ルカーチ、K・コルシュ、A・グラムシ、H・ルフェーヴル、J・P・サルトルたちの人間主義的マルクス主義と、これに挑戦する構造主義的(structuralisme)マルクス主義、たとへばC・レヴィ・ストロースの構造概念をマルクス主義の内にもちこんだL・アルチュセルたちとの、一見矛盾する二つの見解は、つぎの三つの構造体——人間の身体構造、社会構造および自然構造——が人間の実践感性の対象変化運動を媒体とすることによって、弁証法的に統一されると考えている²⁹⁾。

人間の実践感性の対象変化運動は、歴史そのものであって、これは書かれた歴史でもなければ、まして考えられた歴史でもない。この運動は現実肯定(絶対)から出発して、新たな現実を創る運動に発展する。すなわち絶対の相対化過程なのである。

6. 実践哲学

実践感性の対象運動は、無限につづく弁証法的身体運動であることは前記のとおりである。これは、サルトルのいう投企(projet)に通ずるものがある³⁰⁾。人間を、このような運動そのものとして把える哲学は、実践哲学以外の何ものでもない。グラムシも書いているように、「実践の哲学は、近代の最大の理論家たち(マルクス・エンゲルスのこと。筆者注)を通じて…仕上げられた³¹⁾」西田幾太郎は、後期の彼の哲学において「身体の意義を重視し、人間と環境との関係をポイエシス(制作的行為)としてとらえた³²⁾。」彼は、マルクスがあれほどまでに重視した、人間の身体運動について、きわめて深い省察を加えている。「感官的限定が非合理的なるものの合理化の意義を有つといふのも、それは身体的限定の意義を有つといふに外ならない。感官的なるものが行為的意義を有った時、即ち自己自身の意義を有った時、それが身体と考へられるものである。我々の身体と考へるものは、感官的にして行為的意義を有すると共に、又表現的意義を有するものである³³⁾。」

西田幾太郎はまた、芸術的創作作用について、「それが意識的であり、身体運動によって外界に於て物を造るといふ意味を有つてゐなければならない。」そして彼の哲学は「行為

的自己の立場に立つ哲学」である、という見地からマルクスを、つぎのように批判している。「実践を中心とすると称するマルクス哲学といへども、対象的なものから行為の世界を考へようとするかぎり、それは真の行為的自己の立場に立つものではない³⁴⁾。」この批判の中に、行為の哲学と自称する西田哲学とマルクスの実践哲学とのちがいが鮮かに語られている。

7. 実践感性の対象変化運動 と イデオロギー

マルクスは灰色のイデオロギー論者ではなかった。彼は、イデオロギーにたいしては、否定的であり、イデオロギーを非生産的なものと見ていた。

「ほとんどすべてのイデオロギーは、歴史の曲解または、歴史から完全に抽出されたものである。イデオロギーそのものは歴史の、ほんの一面にすぎない³⁵⁾。」「イデオロギーは歴史をもたず、イデオロギーには発展はない…³⁶⁾」

「…fast die ganze Ideologie sich entweder auf eine verdrehte Auffassung dieser Geschichte oder auf eine gänzliche Abstraktion von ihr reduziert. Die Ideologie selbst ist nur eine der Seiten dieser Geschichte.」

だから、彼の共産主義は、ここにのべた意味でのイデオロギーではない。共産主義は、そのような理念とか、固定した思想でもない。共産主義は、実存としての人間の、実践感性の対象変化運動そのものである。

それゆえ、「共産主義は、われわれにとっては、作り出さるべき、ある状態 (ein Zustand) でもなければ、現実が進むべき、ある理念 (ein Ideal) でもない。それは、現状を止揚する現実の運動 (die wirkliche Bewegung) である。この運動の諸条件は、現存する前提から与えられる³⁷⁾。」

「Der Kommunismus ist für uns nicht ein Zustand, der hergestellt werden soll, ein Ideal, wonach die Wirklichkeit sich zu richten haben. Wir nennen Kommunismus die wirkliche Bewegung, welche den jetzigen Zustand aufhebt. Die Bedingungen dieser Bewegung ergeben sich aus der jetzt bestehenden Voraussetzung.」

この身体運動は、たえず現実を止揚する無限の実践感性の対象運動である。したがって、この運動は「まことに浄土にむまるたね」になるのか、「また地獄におつべき業」であるのか、結果は定かではないが、ただそうするのである³⁸⁾。これが実存としての人間なのである。現状を止揚する、ということを実践にほんやくすれば、私的所有 (das Privateigentum) と人間の自己疎外 (die menschlicher Selbstentfremdung) を積極的に止揚する実践感性の対象運動である。この意味で、マルクスは決して「マルクス主義者」ではなかったのである。

8. 実践感性の対象運動 と ゲーテ

ゲーテは、1829年2月17日(木)エッカーマンとの対話の中で、「ドイツ哲学では、なお二つの大きな事業がなされねばなるまい。カントは『純粹理性批判』を書き、はかり知れない功績をあげたが、しかしまだ仕事は完結していない。今や才能ある人、すぐれたる人が『感性と常識の批判』(die Kritik der Sinn und des Menschenverstandes)を書かねばならぬ。これもみごとに仕上げられたら、もうドイツ哲学にそれほど望むべきことはあるまい。³⁹⁾」それから30年、ゲーテが期待した「才能ある人」、「すぐれたる人」マルクスが現われて、「感性と常識の批判」にあたる弁証法的・実践感性批判を書いて、

ドイツ哲学の仕事で、「みごとに仕上げ」たのである。

事実ではないが、真実を象徴的に表現するものと考えるので、ひとつの虚構をゆるしてもらいたい。実践感性の対象運動を主張するマルクスから、受容感性の直観を説くカントへ贈る歌一首。

やは肌の あつき血汐に ふれも見で

さびしからずや 道を説く君（晶子、みだれ髪）

自然で生（なま）のままの生活のすべてを最大限に愛し、尊重したのがマルクスであった。

9. 実践感性の対象運動 と 時間・空間、自由

人間は自然の一部であり、自然は銀河系、超銀河系から素粒子にいたるまで運動している。自然界においては、万物は生成消滅し、不断の運動変化のなかにある。万物は、つねに運動の過程にあり、静止は運動の一契機として理解されねばならない⁴⁰⁾。

カントによると、受容感性の直観は時間 と 空間の形式のもとで可能となる。しかし時間 と 空間は、かえて自然の運動（人間の実践感性運をも、ふくめて）によって産みだされるのである。「存在するすべての物、陸上 と 水中に生存するすべての生物は、なんらかの運動によってのみ、存在し、生きている⁴¹⁾。」のである。そして時間・空間に制約されない、このような運動の中にのみ、人間の自由がある。

「Alles, was existiert, alles, was auf der Erde und im Wasser lebt, existiert nur vermitteltst irgendwelcher Bewegung.」

10. 実践感性運動の優位について

一般に口は尊重され、足は軽視される。インドの「マヌ法典」によると、バラモンは梵の口から生まれ、シュードラ（ドレイ階級）は梵の足から生まれたのであった。江戸時代に武士の最下級者は足軽とよばれた。腕の立つ人を、口八丁、手八丁というが、足八丁とはいわない。わが国では「偉い人」を巨頭というが巨足とはいわない。頭が足に優位する。しかし人間の身体運動を重視し、正しく評価する実践感性運動の立場からすると、頭よりも足を優位させる。アメリカ・インディアンの大族長の一人は「巨足」(Big Foot)とよばれた。いうまでもなく、これは偉大な人という意味である⁴²⁾。乳児が母乳を吸い、幼児が、はいずり廻って運動する。この運動が良心、理性、知性などの頭の機能に先行し、その発達を条件づける。「足軽」、これは最高の評価をうけるべき、実存としての人間をよぶにふさわしい言葉である。この足軽にあたる人間は歴史の上では、賤民、悪人（漁夫、猟師、商人、農民、手工業者）庶民などと、よばれてきた⁴³⁾。この人びとは、本来、自由な実践感性運動であるべきものが、外からの強制によって、苦痛に転化させられ、人間性が、ゆがめられてきた人たちである。

社会が高度「文明」国になるにつれて、足軽から口軽へ移行し、頭の人間、観照する人間に変化し、野性の身体運動、野性の感性が、人間から消え失せる。そして「文明」の辺境で生活する人間が足軽の生活をきつぐ。文明の辺境移動の原理は、ここにある。同じことは、程度の差はあるが、一国の中にも、この種の分業が発生する。足を忘れた社会では、実存としての人間の実践感性運動は存在しがたくなり、したがって歴史の運動は停滞し、ついに停止するにいたる。世界史においては、文 と 野の接触面に生活する人びと、野性の身体運動の主体者たる人びと（marginal man, outsider）が、「文明」を止揚する⁴⁴⁾。

11. 実践感性運動 と フェューマニズム

民主主義といえば、周知のA・リンカーンの有名な言葉が引用される。しかし、私が、これこそ民主主義だ、と感じたのは、リンカーンの、つぎのような平凡な場面である。播州の百姓の子、浜田彦蔵（洗礼名ジョセフ・ヒコ）がアメリカに漂着して、帰化日本人第一号となった。そして、1862年3月12日のことである。この日、ジョセフ・ヒコは国務長官シューアドにすすめられ、彼の紹介で大統領リンカーンと握手する。この状景が私には、非常に興味がある。アメリカ彦蔵の自伝を抜粋してみよう。

「3月12日、…

私たち（ヒコとシューアド筆者注）が大統領室に入ると、大統領は肘掛け椅子に腰をかけていた…彼はすぐ近くにすわっている一人の将校の話をじっと聞いていた。…室に入るときに、大統領は私たちにちらりと目をやったが、シーワード氏は私に椅子を示し、それに腰をおろせと言った。…この男（リンカーンと話をしていた将校、筆者注）がいなくなった後、大統領は腰をあげて、こちらへやって来たので、私たちも席を立ち上った。

『シーワード君、こんにちわ』

と彼は言って、相手と握手した。そこでシーワードは言った。

『私の友人で、日本人のヒコ氏を紹介したいと思いますが』

大統領は大きい手をさしのべて、日本のような遠いところからよく来てくれましたね、と言った⁴⁵⁾。」

このころのアメリカは南北戦争のさ中で、リンカーンは多忙をきわめていたときのことである。にもかかわらず、一人の日本帰化人ヒコの席まで歩いて行ったのである。要約しよう。民主主義とは、こちらから歩いて行って（実践感性運動）やさしく手を握る（対象運動）ことから始まる。

12. 実践感性の対象運動 と ログス

いうまでもなく、実践感性の対象運動はログス以前のものである。ログスは主体的で自由な実践感性の対象運動が停止し、客体化されるところからはじまる。このようなログスは人間の歴史では史料（資料）とよばれているものである。したがって、史料は実存としての人間そのものではなくて、客体化された人間の実践感性運動が、人間の意識によって濾過され、捨象されたものである。マルクスが残した、ほう大な著作はログスとしての資料にすぎない。彼の言葉の前に、いたずらに排絶することは、人間の実存を把えんとする者の正しい態度ではあるまい。彼の言葉の向うにあるもの、言葉以前の实存そのものを把えねばならない⁴⁶⁾。

マルクスは、社会主義体制は資本主義体制よりも優れているから、より望ましいから、われわれは、それに向って努力する、といったような倫理・道徳的（エートス）動機を排除する。労働者が彼らが生産した物の大部分が、資本家によって取り上げられることは、「正しくない」（「unrecht」）とか、そう「あるべきではない」（「soll nicht sein」）とかいう道徳感にのみ訴えるのではない。共産主義の諸要請は、「近代社会の経済的運動の法則」から必然的に産み出されるのであった。だから社会主義の理論は「倫理的感情」（「sit-tliches Gefühl」）の上に構築されたのではなかった⁴⁷⁾。

しかし、マルクスには、それだけでは汲み尽せない何物かが、言葉にならない言葉が、奥の奥にあることを感ぜずにはいられない。

13. 実践感性運動 と 愛

マルクスの生涯を通じて、彼を動かしたものは、「近代社会の経済的運動法則」とか、唯物史観というような理論だけであつたのであろうか。私はロゴス以前に何ものかがあつたと感じている。マルクスのロゴスの根源にあつたもの、それは実存としての人間の実践感性の対象運動と、すべての抑圧された人びとへの愛ではなかつたか。しかし、彼はクリスト者的愛については、「宗教的ざれごと」(「religiöse Tandeleien」)として猛然と反対したのであつた⁴⁸⁾。彼の人間実存の三つの契機の中には、愛情が、はぶかれていた。なぜなら自然な状態における実存としての人間には、愛は自然な日常的なものとして存在していたからである。それは、意識しない愛情であつた。しかし「大道すたれて仁義あり」(老子)。大道時代には仁義のお説教は必要でなかつたが、やがて大道すたれた「文明」時代にはいると、はじめて仁義の規範が必要となる。このとき人間の心にアガペー(Agape)としての愛が燃えはじめる。マルクスは、これを「現実の窮乏によって憤激させられた心臓」(「von der wirklichen Not erbitterten Herzens」)といっている⁴⁹⁾。

B・ラッセルも、マルクスが誇示する科学的予見には、「情緒的な基盤」(「emotional basis」)があり、この情緒は彼の、すべての著作の中に、暗々裡に内在している、と見ている⁵⁰⁾。

H・K・クループスカヤが、1924年1月26日、第二回全連那ソヴェート大会・追悼会議の席で、レーニンの愛について要旨つぎのような演説をした。レーニンが「かつて自から話したことは決してなかつた」ことであるが、「彼の心臓は、あらゆる動労者にたいする、あらゆる被抑圧者にたいする燃えるような愛情によって鼓動していた。」この感情のために、彼は動労者の解放の道を情熱をこめて熱心にさがし求めた。そして、この疑問にたいする回答を、彼はマルクスから受けとつたのであつた⁵¹⁾。

愛はロゴスだけに終るものではない。真の愛の発動形式は、実践感性の対象変化運動である。これは愛の弁証法である。

国のまさに興らんとするや、民に聴く。まさに亡びんとするや神に聴く。左伝⁵²⁾

14. 実践感性の対象運動 と 情熱

さき書いたような熱烈な愛情は、エートス的なものではなく、パトス的なものである。ヘーゲルによれば、情熱とは、「個人全体の中に流れている意欲の全脈管をあげて、一つの対象に没頭し、その個人のすべての欲望 と 力とを、その目的に集中させるものである。」「われわれは、このような関心を情熱(Leidenschaft)と呼ぶ。」、およそ「世の中のどんな偉業も情熱なしには成就されなかつた⁵³⁾。」

ではマルクスは情熱を、どのように理解していたのであろうか。彼は、つぎのように書いている。情熱、それは「対象の本質が私のなかで支配することである。私の本質活動の感性的激発、それが情熱である。このばあい、この情熱が私の本質的活動となる。」「対象の感性的本質としての人間は、それゆえに、苦悩する本質であり、そして自分の苦悩を感ずるがゆえに、情熱的な本質なのである。情熱・激情というものは、人間が対象に向って精神的に努力する人間の本質的な力である⁵⁴⁾。」

「Die Herrschaft des gegenständlichen Wesens in mir, der sinnliche Ausbruch meiner Wesenstätigkeit ist die Leidenschaft, welche hier damit die Tätigkeit meines Wesens wird.」

「Der Mensch als ein gegenständliches sinnliches Wesen ist daher ein leidendes und, weil sein Leiden empfindendes Wesen, ein leidenschaftliches Wesen. Die Leidenschaft, die Passion ist die nach seinem Gegenstand energisch strebende Wesenskraft des Menschen.」

クリスト者的愛には、はげしい批判をあげせたマルクスは、つぎの二つの愛について語る。その一つは、私的所有のなかで、人間疎外の状況のもとで「現実の窮乏によって憤激させられた心臓」であり、第二の愛は、私的所有が止揚されて、人間の存在と、その生活が人間のための、人間による人間の活動を感性的に自分のものとしたときの愛である⁵⁵⁾。したがって、この第二の愛は道徳規範や宗教の戒律などによる外から強いられた愛ではなく、全く自然な、それゆえに、愛を愛として意識しない、人間愛である。

15. 実践感性の対象連動 と 自然回帰

さきに、人間実存の前提としての三契機の節でのべたように、また時間 と 歴史の不可逆性のゆえに、今日を昨日にかえすことはできない。ただ一つできることは、今日の現状を肯定し、それを前提としてのみ明日を創ることである。ひとつの例をあげよう。自然回帰を熱烈に説いたルソーに、ヴォルテールが皮肉たっぷりの手紙を書いた。

「あなたの著作を読むと、ひとは四つ足で歩きたくなります。」ルソーは、彼の返事の中で答えた。

「私としては、私たちの動物性から失った、わずかなものを大いに哀惜してはいても、その動物性を自分のうちに回復しようと、私が熱望しているのではないことは、おわかりになりましょう。この回帰は、あなたにとっては、はなはだしく大きいばかりではなく、有害でもある奇蹟なのですから、その奇蹟を行なうことは神にのみ、ふさわしい業でしょうし、それを望むことは悪魔だけのやる仕事でしょう。ですから、四つ足にまい戻ろうと試みたりしないでいただきたい⁵⁶⁾。」

原子核エネルギーを手に入れた人間に、それを捨てさせることはできない話であり、白米を常食としている日本人に、玄米の功德を説いて、白米食をやめさせることも不可能である。われわれにできることは、原子核エネルギーを持ち、白米を食べている、という現実を前提として問題にとり組むことだけである。実存としての人間には、フィード・バック型の回帰はありえないことは、前の諸節で記したとおりである。すでに、PCBが湾の水やヘドロに蓄積されている、という現実を肯定したうえで、対策が立てられようとしている。「ハツカ・ネズミにPCBを与えてから30分後にコレステラミンという薬をのませると、PCBは吸収され、ほぼ100%体外に排出されるという実験がある。⁵⁷⁾」これが最近の適例である。

唯物史観が、その基盤に設定した実存としての人間は、およそ、こうした存在であることを評論するのが本稿の目的であった。実存としての人間とは、いったい何物であるかを底の底まで究わめつくし、それを根本前提として、この史観がうまれたのである。すべての人間が、釈迦やクリストのような人間になりうるのであれば、その時点でマルクスの学説は一瞬にして崩壊し去るであろう。

最後に、ロンドン郊外のハイゲートの共同墓地にあるマルクスの英文墓碑銘の原文を記しておく⁵⁸⁾。

「Die Philosophen haben die Welt nur verschieden interpretiert, es kömmt daraufan, sie zu verändern⁵⁸⁾。」

あ と が き

エッカーマンの「ゲーテとの対話」(前出)に示唆されて、マルクスが唯物史観の前提とした人間とは、どんなものであったか、という問題を、私なりの解釈にしたがって論述した。そして、マルクスが設定した人間は、実践感性の対象変化運動そのものである。という、いちおうの結論にたどりついた。これを手じかな事例でいえば、ひとが机に向かって歩いて行くのが、実践感性運動であり、机上のナイフを右手で、鉛筆を左手で握るのが、対象運動であり、ナイフを持って、鉛筆をけずる行為が対象変化運動である。そして、この鉛筆を、けずる運動は同時に弁証法的な実践感性の対象運動である。このような主体的な対象変化運動が、やがて終結する。つぎに鉛筆をもって何かを書きはじめるとき、鉛筆をけずる運動が止揚されて、書くという新たな運動へ移行する。と同時に鉛筆をけずる運動そのものが、運動の主体者を徐々に変えていくのである。この運動過程そのままが人間の歴史である。これこそ、ロゴスとしての歴史以前の実存としての人間の歴史であり、人間そのものである。なお本稿では、マルクスの科学的社会主義以前の問題として、彼の情緒的な面をも強調した。

最後に、本稿は1956年4月、京都大学西洋史読書会、春期大会で発表した旧稿「唯物史観の前提としての人間」を補訂したものであるが、独断的な解釈や不測の誤解をおかしていないかを惧れている。これらについては、世の叱正をあおぎ、さらに考究をすすめていきたいと願っている。

註

1. Karl Marx, Deutsche Ideologie. Marx Engels Werke, Bd.3 S.20 Berlin 1962. 以下の引用では、Werke とのみ略記した。
2. ibid. S.29.
3. ibid. S.28.
4. ibid. S.28. 本稿では、下線は、すべて筆者が加えたものである。
5. ibid. S.28.
6. ibid. S.28. 本稿では、下点は、すべて原著のものである。
7. ibid. S.29.
8. ibid. S.21.
9. カント、「純粹理性批判」下、篠田英雄訳、75頁、岩波書店 1970、Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, S.791 Reclam 1970.
10. Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus den Jahre 1844, Ergänzungsband; Schriften bis 1844, Erster Teil S.536 Berlin 1968. 以下の引用では、すべて Manuskripte と略記した。
11. Karl Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung. Werke Bd.1 S.385.
12. 論語、雍也第六。
13. ホイジンガ選集1、里見元一郎訳、ホモ・ルーデンス・河出書房新社、1971年。
14. F. v. シラー、人間の美的教育について、新関良三編、シラー選集2、289頁、富山房1941。
15. 高橋誠一郎、回想90年、44、45頁、筑摩書房1973
16. Karl Marx, Manuskripte, Privateigentum und Kommunismus, S.539.
17. ibid. S.540.

„Die Aufhebung des Privateigentums ist daher die vollständige Emanzipation aller

menschlichen Sinne und Eigenschaften; aber sie ist diese Emanzipation grade dadurch, dass diese Sinne und Eigenschaften menschlich, sowohl subjektiv als objektiv, geworden sind. Das Auge ist zum menschlichen Auge geworden, wie sein Gegenstand zu einem gesellschaftlichen, menschlichen, vom Menschen für den Menschen herrührenden Gegenstand geworden ist." Manuskripte ibid. S. 540.

18. Immanuel Kant, op. cit. SS. 80, 191.
19. 万葉集, 211.
20. Karl Marx, Thesen über Feuerbach 1, Werke Bd. 3, S. 5.
21. J. J. Rousseau, Emile or Education, Everyman's Library, p. 31 London 1930.
22. 朝日新聞1972, 2, 8. この詩の(1), (2)の番号 と 句読点は筆者が加えた.
23. 同上.
24. Karl Marx, Thesen über Feuerbach 3. Werke Bd. 3 S. 6.
25. Karl Marx, Das Kapital. Werke Bd. 23 S. 192.
Marx-Engels, Der Historischen Materialismus Teil 1, S. 52.
Berlin 1930.
26. Karl Marx, Deutsche Ideologie, op. cit. S. 31.
27. シオドーラ・クローバー, 行方昭夫訳「イシー北米最後の野生インディアン」岩波書店, 1971.
28. Marx-Engels, Der Historischen Materialismus, ibid. S. 57.
著者が削除した箇所を, あえて, とりあげたことについては, 問題が残ると思うが, 筆者はマルクス理解のためには, 重要な手がかりと認めて引用した.
29. 竹内芳郎, マルクス主義における人間の問題」岩波講座, 哲学, 「人間の哲学」 3, 261—294頁.
30. サルトル全集, 第13巻, 伊吹武彦訳「実存主義とは何か」11—20頁, 人文書院1955.
31. アントニオ・グラムシ, 上杉聰彦訳「愛 と 思想 と 人間, 獄中からの手紙」合同出版1962.
32. 竹内良知, 「思想史を歩く, 西田幾太郎 と その哲学」朝日新聞1973, 4, 30.
33. 「私の絶対無の自覚的限定といふもの」西田幾太郎全集, 第6巻, 128, 129頁, 岩波書店1965.
34. 「行為的自己的立場に立つ哲学」, 西田幾太郎全集第7巻173頁.
35. Marx-Engels, Der Historischen Materialismus, ibid. S. 57.
本節は, マルクスが初めの原稿から棒を引いて消した部分であるが, あえて引用した. 註28を見られたい.
36. Deutsche Ideologie, S. 27.
37. ibid. S. 35.
レーニンには, マルクスの理論から無条件に借りてくるものは, 研究の方法だけである, と書いている. V. I. Lenin, Chito Takoe 「Druz'ya Naroda」 Sochineniya izdanie chetvertoe tom 1 str. 177.
38. 金子大栄校訂, 「歎異抄」38頁, 岩波文庫, 1973, 4, 30.
39. Johan Peter Eckerman, Gespräche mit Goethe, in den letzten Jahren seines Lebens, S. 243, F. A. Brockhaus Wiesbaden, 1959.
高橋義孝氏訳では Sense は感覚と訳されている.
私の利用したブロックハウス版には Sense はイタリック体になっているので, 下点を加えた.
- 高橋義孝訳, 「ゲーテ対話録」第4巻, 75, 76頁, 白水社, 1968.
40. 岩崎允胤, 宮原将平, 「現代自然科学 と 唯物弁証法」69頁, 大月書店1972.
41. Karl Marx, Das Elend der Philosophie, Werke Bd. 4 S. 128.
42. デイー・ブラウン, 鈴木主税訳, 「わが魂を聖地に埋めよ」下巻, 240—245頁, 草思社1973.

43. 寺尾五郎, 「悪人親鸞」100—108頁, 徳間書店1972.
44. 増田四郎, 「ヨーロッパとは何か」189, 190頁, 岩波新書1967.
45. 中川努, 山口修訳「アメリカ彦蔵自伝1」268—271頁, 平凡社1970.
46. 三木清, 「歴史哲学」, 三木清全集第6巻, 1—287頁, 岩波書店1967.
47. Engels, Vorwort zur deutschen Ausgabe von 'Marx "Elend der Philosophie" Marx-Engels Über Historischen Materialismus, Teil II, S. 23.
48. Karl Marx, Friedrich Engels, Zirkular gegen Kriege, Werke Bd. 4 SS. 3—17.
49. op. cit. S. 13.
50. Bertland Russell, History of Western Philosophy, Karl Marx. p.753 sixth impression, London 1971.
51. N. K. Krupskaya, O Lenine, str. 19 Moskva 1965.
52. 左伝, 荘公32年, 諸橋徹次「中国古典名言事典」246頁, 講談社1972.
53. ヘーゲル, 武市健人訳, 「歴史哲学」上, 86—88頁, 岩波文庫1973.
54. Karl Marx, Manuskripte, S. 579.
55. op. cit. ibid. S. 540.
56. ルソー, 本田喜代治, 平岡昇訳「人間不平等起原論」194, 195頁, 岩波文庫1972. 酒井伝六, 「ピグミーの世界」256—258頁, 朝日新聞社1973.
57. 朝日新聞1973, 7, 19, 夕刊.
58. Werke Bd. 3, Thesen über Feuerbach 11, S. 7.

Summary

In this article, I would like to investigate the problem: 'On what sort of man did Karl Marx base his materialistic interpretation of history?' I came the conclusion that Marx set up not so much a receptive sensible man, as a subjectively practical, sensible man. That is a man as existence, who changes subjectively an object by his body movement. Such a movement of his practical sensibility toward an object is nothing but a dialectical movement. Man can change an object by such a body movement and at the same time by this act he can change his own nature, too.